談話研究における「コンテクスト」とは何か？

ー談話分析の実例から考えるー

企画責任者：　山口征孝(神戸市外国語大学)
話題提供者１：山口征孝(神戸市外国語大学)
話題提供者２：植野貴志子(ノートルダム清心女子大学)
話題提供者３：片岡邦好(愛知大学)
話題提供者４：武黒麻紀子(早稲田大学)
話題提供者５：井出里咲子(筑波大学)
指定討論者：　野澤俊介（北海道大学)

1. はじめに（山口征孝）

生きている状態としてのコミュニケーションにおいて，「コンテクスト（文脈，背景，状況，場面)」と談話は分かちがたく結びついている．改めてこのコンテクストとはなんであろうか．これまでに日本の社会言語科学におけるコンテクストの概念は，特に対人関係や社会規範との結びつきが重視され，社会的距離，上下関係，また場における丁寧さがいかにコンテクスト（文脈・場面）に基づいて実現されるかを明らかにし，そこから聞き手中心性，共話志向といった日本語談話の特徴がコンテクストに深く関連することが指摘されてきた．これに対し欧米（特に英語圏）でのコンテクスト概念の探究は，グライスの会話の定理やポライトネス理論に代表されるように，個人の意図や，普遍的な理論構築を重視しながら発展する傾向にありながら，それらの研究の限界が指摘されてきている．

では Duranti & Goodwin (1992)が編集した *Rethinking context*（コンテクストを再考する）出版後，30 年余りが経過している現在，談話研究（言語人類学，会話分析（CA)，批判的談話分析（CDA)，その他関連分野）ではコンテクストの概念はどのように理論化され，実際の分析ではどのように扱われているのだろうか．本 WS では談話研究におけるコンテクスト概念をめぐる大きな批判・論争を振り返った後，言語人類学と日本発祥の場の理論を中心に談話分析の実例を通しコンテクスト概念を多角的，かつ発展的に検討する．

グローバル化やデジタル化がもたらす変化により，私たちはメディア化された社会を常に生き，そこに生起するコンテクストは多層的で流動的なものとなりつつある．生成系 AI の発展により，人間と AI の対話の質の向上が進む中，昨今では AI が，パラ言語や感情，倫理観なども含めた人間らしく，かつ動的なコンテクストを理解することを目指した研究が進むとともに，人間同士の意思疎通の補助や人間と AI の共存を目指して，言語学や認知科学，社会工学などの知見を統合した研究も活発となりつつある．本 WS は，談話研究にとって有益な「コンテクスト」の概念化を，実証研究から問い直すことで，社会言語科学の更なる発展に貢献し，今後の研究への指針を提供することを目的とする．

2. 談話研究における「コンテクスト」をめぐる論争：本 WS の背景（山口征孝）

本導入では，CA，CDA，言語人類学における「コンテクスト」の概念化の違いに着目し，談話研究におけるコンテクスト概念(Duranti & Goodwin, 1992; Goodwin & Duranti, 1992 参照)に関する大きな二つの論争の論点をまとめる．まず，学術誌 *Discourse & Society* における Schegloff(1997)と Billig(1999a, 1999b)の論争を取り上げる．Schegloff は，会話参与者自身が明示的に指向したカテゴリーだけが分析者にとって「関与的コンテクスト」であると主張する．それに対し，Billig は CA における分析者の前提が分析に介入しない「中立性」という主張に疑問を呈し，更に参与者には「平等に会話に参加する権利」が与えられているという前提の「イデオロギー性」を批判している．更にそれに対し，Schegloff は，CDA では分析する側がアプリオリに力関係を措定しており，コンテクストが分析以前に固定化されているという批判を行っている．この批判に対し，Billig は分析を行う側の前提が分析に影響を与えないという主張自体の単純素朴さ(naivete)を指摘している．この論争は決着がつかず現在に至っている．しかし，これに続く CA や CDA を中心した多くの談話研究者がこの論争に言及している点で，現在でも重要な論争であると言えるだろう．

二番目の論争は，CDA を牽引する研究者である Teun van Dijk と言語人類学の権威の一人である Alessandro Duranti の間での「話者の意図性とコンテクスト」という問題を中心にしたものである．この論争は，長らく共同研究を行っている「研究仲間」である二人が，電子メールという媒体で行った比較的インフォーマルなやり取りが，ほぼそのままの形で Durani(2014)の 7 章に掲載されたものである．「論争」は，2004 年の 11 月 1 日に，van Dijk が Duranti に送った"a theoretical question"から始まる．そこでは，言語人類学における発話行為理論（特に Searle）における意図(intentions)という概念批判に対し，人間の相互行為に意図性が存在しないことはあり得ない，という「質問」から始まっている．それに対し，Duranti は，言語人類学における「反認知主義的バイアス」を認めると同時に，発話行為理論における意図性は英語話者の「民俗理論」(folk theory)であり，話者以外のコンテクストを考慮に入れていない点で不十分であるとしている．さらに Duranti の共同研究者である Jason Throop が論争に加わり，非専門用語としての「意図性」は曖昧であると同時に，「時間性」(temporality)に欠けた概念であるとして，シュッツ（Schutz）による"in order to" vs. "because" motives(未来の目標に向かっている動機か，過去の経験に基づいた今現在の行動の動機か)の区別を導入しいている．これに対し，van Dijk は，「意図性」という用語の曖昧性は認めるものの，意図性のない相互行為は不可能であり，特定の状況の中で自分にとって関連性があると話者がみなす状況の一部の主観的な解釈を「コンテクスト」として定義し，この解釈を一種のメンタルモデルとしてモデル化することを提唱している．また，心理学的説明の否定という言語人類学（及びその他の談話研究）におけるトレンドは，Duranti を中心とした反意図性主義(anti-intentionalism)に基づいたコンテクストの概念化とも共通している点を指摘し，談話研究に認知的コンテクストの導入の必要性を唱えている．van Dijk はこの論争後，三冊の著書を著しているが，その一冊である *Society and Discourse*（van Dijk, 2009)では，特に William F. Hanks の「コンテクスト」の「曖昧な説明」に対し辛辣な批判をしている．一方，Duranti は Husserl 哲学を援用したよりきめの細かい「意図性」の理論を提唱している（Duranti, 2014）．

上記の論争を踏まえ，今現在「コンテクスト」はどのように概念化されており，広い意味での談話研究（コミュニケーション研究全般を含む）の実証研究におけるデータ分析の際に，どのようなコンテクストの側面が前提(background)とされ，どのようなコンテクするが前景化(foreground)されているのであろうか．本 WS では言語人類学者である William F. Hanks が西田哲学を取り入れて開発した新しいコンテクスト理論としての「場の理論」を，植野が日本語の自称詞の使用の分析に用いる．続いて，日本を代表する言語人類学者 3 名（片岡，武黒，井出）がコンテクストの概念の射程を広げることで，「コンテクストとは何か」という問題を実際のコミュニケーションからの実例を分析することで再考する．指定討論者は記号論的人類学を専門とし，本 WS で志向する包括的なコンテクスト概念を射程に入れた研究を行っている野澤俊介である．

参考文献

Billig, M. (1999a). Whose terms? Whose ordinariness? Rhetoric and ideology in conversation analysis. *Discourse & Society*, 10(4), 543-558.

Billig, M. (1999b). Conversation analysis and the claims of naivety. *Discourse & Society*, *10*(4), 572-576.

Duranti, A. (2014). *The anthropology of intentions*. Cambridge: Cambridge University Press.

Duranti, A. & Goodwin, C. (Eds), *Rethinking context. Language as an interactive phenomenon*. Cambridge: Cambridge University Press.

Goodwin, C., & Duranti. A. (1992). Rethinking context: an introduction. In A. Duranti & C. Goodwin (Eds.), *Rethinking context. Language as an interactive phenomenon* (pp. 1-42). Cambridge: Cambridge University Press.

Schegloff, E. A. (1997). Whose text? Whose context? *Discourse & Society*, 8(2), 165-187.

van Dijk, T. A. (2009). *Society and discourse: How social contexts influence text and talk*. Cambridge: Cambridge University Press.

3. 「場の語用論」における「場」の概念—全体の一部として話す—（植野貴志子）

3.1 はじめに

本発表では，前半部で，「場の語用論」(Hanks et al., 2019; 井出・藤井編, 2020 等）における「場」の概念を整理する．後半部では，「場の語用論」の展開として，「場所」（西田, 1987）の概念を筆者独自に応用し，日本語の自称詞の使用を分析する．具体的には，「場所」に「場」を「映して見る」という視点を取り入れて，自称詞の選択と自己の分節のプロセスを解釈し，「全体の一部として話す」という見方を提示する．

3.2 「場の語用論」と「場の理論」

「場の語用論」は，欧米発の理論のみに依らず，非欧米の枠組みも取り入れ，言語・コミュニケーションを新たな視点で捉えることを目指す「解放的語用論（Emancipatory Pragmatics）」（Hanks et al.，2009 等）の一環として発展してきた．

「場の語用論」の基盤には，生物物理学者・清水博による「場の理論」（2003 等）がある．清水（2003 等）は，近代科学が前提とする自他分離・主客分離的な方法論では，人間の生命の活きや内部世界を十分に説明できないと批判し，生命科学と西田哲学を結び付けた理論を提唱した．清水は，自己の構造を，個としての活きを担う「局在的自己」と全体としての活きを担う「遍在的自己」の二領域からなると説明する．「場」とは，「遍在的自己」の広がりに相当する．「遍在的自己」の活きによって「場」の状態が自己のうちに映され，自己は「場」と整合的な活きをすることができる．

Hanks et al.（2019）は，清水の「場の理論」や西田哲学の「場所」の考えを参考にしながら，言語・コミュニケーションにおけるコンテクストへのアプローチとして，未分節の primary *ba* と分節化された secondary *ba* という概念を提案した．Primary *ba* は，西田の「絶対無の場所」に対応し，分節化，言語化される以前の自他未分・主客未分の段階を指す．一方，secondary *ba* は未分節の状態が分節化され，言語化された段階を指す．このような概念化により，未分節から分節化というプロセスや，発話を生み出す下意識的な深層を議論するための枠組みが提供された．

3.3 「場所」と自己の分節：日本語の自称詞の使用

ここでの「場所」（西田，1987）とは，主客未分の「純粋経験」から主と客に分かれ，認識や判断へと発展する意識現象が於いてある意識野を指す．「純粋経験」が「場所」に映ることで「見る」という反省が引き起こされ，対象が分節化，言語化される．分節化とは対象を顕在化させることであり，その背後には対象を顕在させる「場」の暗在的な活きが存在する．

あるスポーツ番組のインタビューで，一選手が自分を指して「僕」と「俺」を使い分ける現象を取り上げる．この現象を自己の分節という観点から捉えると，話者は刻々と変化する「場」を「場所」に映し，「場」と整合した自称詞を直感的に選択することで「僕」や「俺」としての自己を顕在化させていると解釈される．「場」は発話の場面にとどまらず，言語共同体という全体的な広がりをもつ．自己の分節のプロセスは，全体としての「場」を「場所」に映し，「場」を暗在的な活きとして内在化することによって実現する．このことから，「全体の一部として話す」という見方が可能になる．

参考文献

藤井洋子・井出祥子(編)（2020）．場とことばの諸相　ひつじ書房

Hanks, W., Ide, S. & Katagiri, Y. (2009). Towards an emancipatory pragmatics, *Journal of Pragmatics*, 41, 1-9.

Hanks, W., Ide. S, Katagiri, Y., Saft. S., Fujii, Y. & Ueno, K. (2019). Communicative interaction in terms of *ba* theory: Towards an innovative approach to language practice. *Journal of Pragmatics*, 145, 63-71.

西田幾多郎（1987）．西田幾多郎哲学論集Ⅰ 上田閑照(編) 岩波書店

清水博（2003）．場の思想　東京大学出版会

植野貴志子（2022）．日本語と英語における自己の言語化―「場所」に基づく一考察―　岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子(編) 場と言語・コミュニケーション　ひつじ書房　pp. 97－122.

4. コンテクスト化と多声性―「道案内」におけることば、身体、環境―（片岡邦好）

4.1 はじめに

本発表では，Duranti & Goodwin（1992）以降の展開と共通理解に則り，「コンテクスト」を所与のものではなく，参与者(間)の状況認知，複数の知覚，共有知識，環境要因，社会・文化的要因といった多層的なフレーム間のネットワーク的往来と統合により浮かび上がる刹那的な「図（figure)」（コミュニケーションの地平という「地（ground)」に対する）と位置付ける．この点でコンテクストは，(濃淡のある)「コンテクスト化の合図」(Gumperz, 1982) の集積からなる「過程」であり，かつ流動的，交渉的，創発的な「産物」である．この認識に基づき，屋内／屋外における空間指示や移動を題材として，特定環境における参与者間の理解が発話，指差し，視線，身体スペースといった記号的資源によりどのように紡がれ，エンクロニックに（Enfield, 2014）出現するかに着目する．それにより，コンテクストとは比較的エティックな枠組みに沿って浮上するものの，発話の展開において較正される可塑的かつ状況的なアフォーダンスの集積であることを確認する．

4.2 コンテクストの可塑性

「コンテクスト」の重要性が問われたのは近年の話ではない．焦点化された言語行動を「図」と捉えるならば，それが展開する場面を「地」としてコンテクストに例える発想は 20 世紀初頭のゲシュタルト心理学に遡る．特にダイクシスの理論化に際しては物理的コンテクストが意識されたが（Bar Hillel, 1971），語用論における social deixis の分類においては，

物理的，認知的な領域を超え，社会文化的な規範が表出する場として提起された（Levinson, 1983; Hanks, 1989）．一方，社会学やサイバネティックスの分野でも「フレーム」という概念により共有知識や慣行にもとづく解釈のプロセスが検討されたほか（Bateson, 1972 ; Goffman, 1974），Sacks（1972）やSchegloff（1972）らの事例にみる通りメンバーシップ・カテゴリーが喚起する解釈枠（一種のコンテクスト）において発話が理解可能となることが示された．このような「外部から内部」，「具象から抽象」，「所与から選択」への概念化の移行は「コンテクスト化（contextualization）」という概念により創発的なプロセスとして定義され（Gumperz 1982），現在のコンテクスト概念の嚆矢となっている（Duranti & Goodwin, 1992）．その後，コンテクストの在り処と認識母体の不定性に関する議論を経て，現在では記号的資源の積み重ね（entextualization）通じた相互行為の輪郭形成（contextualization）の帰結であると定義される（Silverstein, 2022）．本発表は，その経緯の上に立って「コンテクスト」の立ち現れ方を実例により考察する．

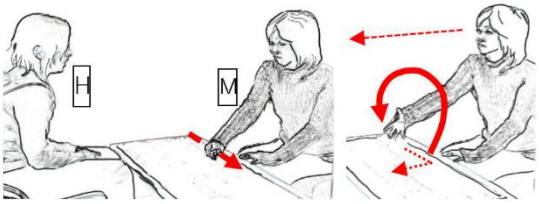
4.3　分析データと考察

屋内／屋外における道案内というスピーチ・イベントでは，単に話し手が聞き手にルート情報を提供するだけでなく，発話，指差し，視線，身体スペースといった記号的資源の積み重ねによりコンテクストの輪郭が形成されると考える（cf. Schegloff, 1972; Sicoli, 2016）．つまりコンテクストは，理解調整や齟齬の解消といった交渉プロセスの成果である．このコンテクストは指示場面におけるオリゴや「参照枠」（Levinson, 2003）に従って社会化・慣例化されている一方で，コンテクスト化に向けた操作方略として主に内的なスタイル（登場人物視点的，行為者内在的）と外的なスタイル（観察者視点的，相対的）からなる連続体上の選択肢として存在する（McNeill, 1992, Levinson, 2003; 片岡, 2018 参照）．これらの視点スタイルは一人称／二人称／三人称／非人称（全能神）の視点により肉付けされ，いわば視点の「多声性」（Bakhtin, 1981）により変容し，統合されていく．例えば道案内は，経路指示の「依頼／示唆」という行為により導入され，発話，身体，環境，文化規範等のアフォーダンスの集積によりテクスト化されるが，その時点ではまだコンテクストの輪郭はおぼろげ（つまりスキーマ的）であり，明確な「コンテクスト」形成の途上にある．つまり道案内のコンテクストとは，「依頼／示唆」によって直ちに現出するものではなく，記号的資源の投入という過程の中で湧出する未完の累積過程といえる．以下，典型的な２事例を片岡（2018）にもとづき紹介する．

4.3.1 内在的表象

内在的表象とは，自己または他の指示基点に内在する方向性に基づき空間活動を描写する方法である．事例（1）において，まずMは，右手を目的地（他の友人宅）への移動者に見立て，「まっすぐい- 行くと」と修復しながらテーブル上を左方へ移動させる（a）．そして「右っかわに」（b）と発しながら弧を描いて右手を移動主体の右側に反転させる（波線がジェスチャー・ストロークに相当）．この方向は，「仮想の移動者」に内在する「右」であり，発話，ジェスチャー，テーブル（類像性により仮想地図をアフォードする）といった記号的資源の蓄積により，目的地への輪郭（コンテクスト化）が浮かび上がる．この場面では，発話のみで内在的表象か外在的表象かを区別することはできないが，「まっすぐ」と「右」に付随するジェスチャーから登場人物の視点ではないと判断できる．またMは，「右っかわ」と述べる際に，空間移動上の結節点であることをHへの視線配布により明示，確認している．

(1) M：　まっすぐい- 行くと：(a)
右っかわに (b)（(弧を描いて回転)）団地があって、...

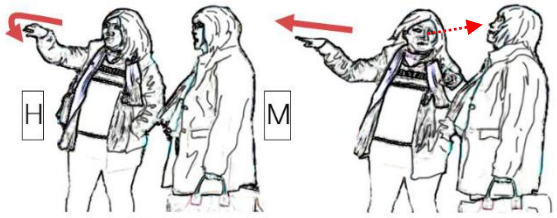


(a)　(b)

4.3.2　外在的表象

外在的表象は，他の事物に固有の方向性（内在参照）とともに地理的環境（絶対参照）への意識が活性化する視点スタイルである．事例（2）において，HとMは目的地の市役所のみならず「そこ」も見ることはできないが（この「そこ」は前方照応であり，既出の「二つ目の信号の交差点」を指す），経路上の顕著なランドマークは空間情報を scaffold するための結節点をアフォードする．ここで話者Hは，移動主体には同化していないものの，手指によって「仮想の移動主体」を模している．そして「曲がって」(a) と発した時の手形は，単なる右方向への指差しではなく，右手自体を捻じって仮想の移動者そのものの行動を模写している．そして目的地である「市役所」(b) を指示する際にはMに視線を向け，前方に腕を伸ばして人差し指による指示に移行している（絶対的指差し）．よってこの一連の空間描写は，内在から外在へ複数の「声」を通じて道案内コンテクストの輪郭を顕在化させている．

(2) H: そこを：.. ん：右に曲がって：(a),
..歩いていくと：：(1.8) 市役所(b)。



(a)　(b)

以上の分析より，道案内コンテクストとは外界をナビゲートするために最適化された，言語，身体，環境等のアフォーダンスからなる「多声的」な実践であり，記号的資源の集積から創発する体系的でありながら，包括的で弁証法的な過程かつ産物であると捉えることができる.

参考文献(抜粋)

Duranti, A., & Goodwin, C. (1992). *Rethinking context: Language as an interactive phenomenon*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hanks, W. (1989). Text and textuality. *Annual Review of Anthropology*, 18, 95-127.

片岡邦好 (2018). 空間的視点片岡邦好 (2018). 空間的視点取り類型と対照研究への応用について―空間描写と身体表象を中心に― 社会言語科学,**21**(1), 19-34.

Levinson, S.C. (2003). *Space in language and cognition: Explorations in cognitive diversity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Schegloff, E. (1972). Notes on a conversational practice: Formulating Place. In Sudnow, D. (ed.), *Studies in Social Interaction*. New York: The Free Press, pp. 75-119.

Sicoli, M. (2016). Formulating place, common ground, and a moral order in Lachixío Zapotec. *Open Linguistics*, 2: 180-210.

Silverstein, M. (2022). *Language in culture*. Cambridge: Cambridge University Press.

5. 世界にいるということ―Protactile 言語に関する研究の紹介を通して―（武黒麻紀子）

5.1「コンテクスト」にまつわる学術的変遷

コンテクストと聞いて，元チョムスキー派で変形生成文法にも取り組んだR. Lakoffの“Language in context”(1972)を思い出す人がどれほどいるだろう．とりわけ脚光を浴びた女性語事象を超えて言語研究全般に「言語外コンテクスト要素(extralinguistic contextual factors)」を取り込むべく一石を投じたのが約半世紀前，ちょうど語用論，社会言語学，認知言語学，言語人類学，会話分析で主要理論が次々と発表された時期にあたる.Goodwin & Duranti(1992)や近年のLevinson(2024)が振り返るように，この半世紀，コンテクストをめぐる諸課題は関連領域の底流にあり続けてきた.

古典的な言語中心主義的コミュニケーション観に基づくオースティンやグライス哲学の語用論では自由な個人の意図が決定的役割を果たし，社会的コンテクストや身体の関与はほとんど考慮されなかった。その後，社会言語学や言語人類学で取り入れられていった実践理論（Bourdieu, 1977）では個人が受ける社会的制約に焦点が当てられ，実践行為の中心は身体となり，それがハビトゥスを形成する場とされた(Hanks, 1996; Coupland, 2016).かつての「言語外コンテクスト要素」，言うなれば言語プラスα（伝統的文法で「ノイズ」）だったコンテクストから，個人の意図や言語構造よりはるかに奥深く，集団的で社会制度的に埋め込まれた再帰プロセスをもととする指標の場(indexical ground)・身体の場(corporeal field)としてのコンテクストへ，理解もスタンスも変化していった.（このほかコンテクストにまつわる学術的な変遷は数え切れない.）

今，再び，言語とは？コンテクストとは？を考えるにあたり，マルチモーダルや多感覚性，実質性，そして長年周縁に置かれてきた対象への関心が高まる中，これらを包摂するような研究動向が見られる．この時代にコンテクストを取り上げる本WSの探索的趣旨に即し，一知半解ではあるが，そうした最近の研究から一部を紹介し，議論のきっかけとしたい.

5.2 「言語の限界」で触覚的になる―Edwards(2024)の研究紹介

多感覚性に関する研究の進展が目覚ましい．本稿ではヤコブソン(Jakobson, 1960)の言語の６機能モデルで「接触」にあたる触覚中心のコミュニケーションを例にコンテクストを考えてみる．鳥越(2020)は触手話の談話的方策・音韻・文法構造の変化，そこでの通訳の関与について言語学的文献を多数振り返り，視覚言語である手話と比較したときの触手話の特徴を論じた.その中でいくつも挙がってくる事例は，米国西海岸シアトル市の盲ろう者コミュニティで 20 年以上に渡ってエスノグラフィを続けるエドワーズによる一連の研究成果である.本発表では，言語人類学で話題沸騰中の著書（Edwards,2024)からシアトル市のコミュニティで起きたprotactile運動の背景と内容を説明し，コンテクストにまつわる論点を取り上げる.

1990 年代，シアトル市の２つの盲ろう者コミュニティでは，盲ろう者が中心となって世界における新しいあり方を模索する動きが出てきた．通訳者として活動してきたエドワーズによると，この動きが出る前は盲ろう者同士が直接やり取りをすることは極めて稀で，ほぼ必ず通訳者を介していたという.アメリカ手話(ASL)を習得したろう者が，徐々に視力を失っていく段階でそれまで使ってきた ASL に代わりアメリカ触手話[1](TASL)を使い始めるといった場合，通訳者からさまざまな情報

[1] Protactileな人々が行なっていることはsigning（手話）とは全く違うとして，protactileの教育者たちはprotactile languageをsign languageや

（例：グループ討議なら次の話者がジェスチャーで示されたときの合図，カフェでの会話なら内観や周囲の客の様子）を受け取ることになる．そこではあくまでも通訳者がコミュニティの中心的な役割を担い，視覚的な規範に基づいて世界が表象されることになる．

視力を失いつつあった人々は通訳者がもたらす情報を，徐々に出現してくる触覚的な世界に落とし込んでいく過程で，言語の限界(limits of language)と格闘していることに気づき始めた．例１から考えてみよう．

(例１)ある雨の日，エドワーズと盲ろう者のシャーロットがカフェで話している．通訳者のエドワーズは，雨の音，曇った窓ガラス，音を立てるエスプレッソマシン，音が止んだ後の静寂，レジの周りに置かれたマグやコーヒー器具などのセール品，周りの客の一風変わった様子を伝えた．シャーロットはこうした状況描写がなかったら“all I have is a conversation with you, and this coffee. I'm not really here in this place.”(10) と言う．

シャーロットの発言は通訳からの情報をありがたく思ってのものである．しかし，シャーロット自身で「その場にいる」と心底感じるためには手を伸ばして周囲のものにどんどん触れて，視覚情報を補っていけばよいのだろうか．その世界にいる，と感じるために本来何が必要なのだろうか．通訳を介したやりとりだけで解決できないことへ両者が煩悶し始める．

さらに例１に働いている記号のプロセスとして fog を例にとってみよう．Fog や曇りは湿気を，湿気は締め切った店内の混み状況もしくは雨を、雨は憂鬱な気分を，といったつながりが想像されうる．けれども，視力を失い始めていたシャーロットが fog からこうしたつながりを生み出していくのは困難で，いずれそうしたことがコミュニケーションの前提とできなくなるという．ここに言語の限界が立ち現れる．他にも，支援のための技術を使う事例で，技術装置の与える指示がその場に存在しない「言語外コンテクスト要素」を前提としていたために，装置の使いにくさを訴えられた技術提供者（支援者）の方が理由がわからず混乱してしまう話が出てくる．コンテクストとは，誰にとっての，何を前提としたものなのか，が問われている．

それまで常に通訳者から知識を受け取る側にあった盲ろう者たちは，通訳者を介さずに触覚を通して世界を表現することを掲げ，自分たち同士による直接対話や共同実践の取り組みを開始するようになった。これが「protactile 運動」で，protactile language という新しい言語につながっていく．言語を用いれば，世界（=コンテクスト・出来事・環境）に注意を向けたりその世界についての言及はできるが，かといって言語が全ての代わりになるわけではない．その言語が使用される世界が，ある話者にとって意味を成すものでなければならないことをこの運動は示している．

ポジティブな気持ちだけでは済まされない苦労や困難を抱えながらも前に進もうと立ち上がった人々が辿り着いた結論は，世の中の諸活動は触覚的に行えるし，視覚と聴覚が人生に必要である理由はない，ということであった．本発表では，protactile 運動の理解に不可欠な「命題によって生み出される意味」と「世界にいるということで生み出される意味」について，Kockelman(2006)の概念を引用して考えていく．

エドワーズは，視覚や聴覚を持つことがかえって自分たち（sighted persons)の感覚を欺くこともあり，protactile を意識することで自分の身体が空間のどこにあるのか，その位置を把握する感覚(proprioception)が研ぎ澄まされるようなやりとりが可能になる，とも述べている(Edwards, 2023, 2024)．今後，触覚や平衡感覚が前景化されたコミュニケーションの研究が増えるにつれて，コンテクストのとらえ方をはじめ，どのような新しいテーマや広がり，課題がもたらされるのか．半世紀前にはなかったバーチャルリアリティや複合現実などが日常のものとなり，ポストヒューマンの経験すら可能となった今日，コンテクスト再考はまるでメタバースの深海に潜っていくような底知れない挑戦である．

参考文献

Bourdieu, P. (1977). *Outline of a theory of practice*. Cambridge: Cambridge University Press.

Coupland, N. (2016). Introduction: Sociolinguistic theory and the practice of sociolinguistics. In N. Coupland (ed.), *Sociolinguistics: Theoretical debates*. Cambridge: Cambridge University Press.

Duranti, A. & Goodwin, C. (1992). *Rethinking context: Language as an interactive phenomenon*. Cambridge: Cambridge University Press.

Edwards, T. (2023). The hands as reflex republic. *Signs and Society* 11(2): 223-235.

Edwards, T. (2024). *Going tactile: Life at the limits of language*. Oxford: Oxford University Press.

Hanks, W. F. (1996). *Language and communicative practice*. Boulder: Westview Press.

Jakobson, R. (1960). Linguistics and poetics. In T. Sebeok (ed.), *Style in language*, 350-377. Cambridge: MIT Press.

Kockelman, P. (2006). Residence in the world: Affordances, instruments, actions, roles, and identities.

tactile sign language と呼ばないように主張している．Tactile language の名称が好まれるという（Edwards, 2024: 8).

Semiotica 162, 19-71.
Lakoff, R. (1972). Language in context. *Language*, 48(4), 907-927.
Levinson, S. C. (2024). *The Dark Matter of Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
鳥越隆士 (2020). 盲ろう者の触手話に関する手話学的検討:文献的考察 兵庫教育大学研究紀要, 56, 59-69.

6. 談話における共振、共鳴と感情（井出里咲子）

Duranti & Goodwin (1992) 以降続く研究動向において, Deschrijver & Georgakopoulou(2023)は談話研究におけるコンテクストが(a)動的かつ相互行為的に達成されること, (b) メタ語用的認識に根差すこと, (c) 歴史化され多面的であることを述べる. こうした固定的な力関係や客体化可能な対象としてのコンテクスト観からの離脱は, コンテクストがその予備的状況においてすらアプリオリに存在せず, 記号の指標性の連鎖や反復を通して「厚みを増し」(cf. Silverstein, 2022), 創造され, 変容するとする記号系言語人類学, またエスノグラフィを通じて社会的価値やジェンダー／階級／世代といった社会的枠づけ, 行動様式などが形成される過程を描く言語社会化論が牽引してきた向きがある.

こうした流れの一方で菅原(1996)は, 対面相互行為を準拠枠とする研究動向がこれほどコンテクストにこだわることに, 仮説検証を積み重ねた先の超歴史的な人間認識への反省があるとしつつ, 発話内容の継起的変遷こそが「文脈」をかたちづくるという「言語中心的な考えかた」の慣習を問い, 「言語もまた身体という単一の場に包み込まれた活動」であるという視点の重要性を提示する（菅原, 1996: 18-19). さらに昨今の場の理論（本WS 植野発表）は, 言語コミュニケーションにおけるコンテクストとして, 自他非分の純粋経験としての域を提示し, さらにコンテクスト理解に広がりと深まりが起きている.

上記を背景に, 本発表では英語の談話データの分析から, やりとりの中に即興的に創発するくり返しや平行体による共振（同期）と共鳴が, 意味として還元し難い感覚・情動的な結びつきとして, 新たなコンテクストと共在性を生み出すことについて考える. ここでいう共振や共鳴(resonance)とは音や身体的動作が共通してリズムや調和をもつことで, 互いに響き合い, 感情や理解が深まる現象をさす. 事例としてアメリカのコンビニでの店員と客の間のやりとり（事例１）と, #BLM デモの現場において収録, 拡散されたデモ参加者間のやりとり（事例２）から, 音や語句の反復による共振・共鳴により, 創発的に非言及指示的な意味が立ち上がる様相を記述的に描写する(cf. 井出 2016, 2022). 事例１ではサービスという制度的場面で生じたスモールトークにおいて, 自己開示に端を発するやりとりに生じた平行体がコンテクストのフレームを動かし, 客と店員といったその場での役割を超えて意味がコンテクストとして創出される様子を確認する.

事例１ ((コンビニの店員に客が空港への生き方を尋ねる))
01 客： hi there (.) can you tell me how to get to the airport from here?
02 店： no *hhh* I can’t (.) I’m sorry
03 客： oh dear oh thanks
04 店： if I were in Massachusetts I could *ha ha haaa* Logan (.) sure *huhh*
05 客： oh well (.) if I were in Massachusetts I wouldn’t need to ask (well)
06 店： *ha haa* do you know where the old airport is

事例２では, 2020 年５月のジョージ・フロイド殺害事件をきっかけに起きたデモ現場という社会的コンテクストの中において, 偶発的に生じた話者間の発話における平行体と引き込みが, その場に新たな記号的意味を創造し, その連鎖が間テクスト的に共鳴する過程を概観する. そこでは声や身体の同期と共鳴から意味が自ずと立ち上がり, 個人としての話者の主体性や意図性はその場に埋没する.

事例２ ((ピケ線の傍で, 大声でわめき出したデモ参加者の男性に対し, もう一人の男性がなだめに入る))
01 31: [come here talk to me] (.) I understand (0.3) how old are you↑=
02 45: =I’m tired of this [shit man]
03 31: [>how old are you↑<] ((grab 45 by the arms))
04 45: I’m forty five years [old ma:n]
05 31: [forty five] and I’m thirty one
06 45: and I’m tired of see[ing this shit man]
07 31: [and you the older] generation than me and

本発表でいう同期(synchrony)・共鳴(resonance)とはDuBois(2014)の「対話的響鳴」現象であるとともに，植野（2016）の「融合的発話」であるが，特に平行体やそこに生じる共鳴は意味が即興的に立ち上がる源として捉えられてきた（Duranti & McCoy, 2020）．これらに加え，発表では中村雄一郎（1991）の「共振」におけるリズム振動，木村大治(2003)の「共在感覚」について引きながら，コミュニケーションにある存在と意味を発生させる根源的リズムとしての同期と共鳴が人間が生きるコンテクストとしての環世界であることを論じたい．

参考文献

Deschrijver, C. & A. Georgakopoulou (2023). Context in discourse analysis, *The Cambridge Handbook of Language in Context*, 71-92. Cambridge: Cambridge University Press.

Duranti, A. & M. McCoy (2020). Language and creativity: Improvisation. In *The International Encyclopedia of Linguistic Anthropology*, 797-805, Oxford: Wiley Blackwell.

井出里咲子（2016）．スモールトークとバンパースティッカー――公共の場におけることばの感性的快をめぐって 村田和代・井出里咲子編 雑談の美学―言語研究からの再考 ひつじ書房 pp.261-280.

井出里咲子（2022）．ジョージ・フロイド事件におけるデモと詩の生成―嘆願のポエティクスを中心に 片岡邦好・武黒麻紀子・榎本剛士編 ポエティクスの新展開―プルリモーダルな実践の詩的解釈に向けて ひつじ書房 pp.131-158.

木村大治（2003）．共在感覚 京都大学学術出版会

中村雄一郎（1991）.共振する世界　青土社

Silverstein, M. (2022). *Language in Culture: Lectures on the social semiotics of language*. Cambridge: Cambridge University Press.

菅原和孝・野村雅一（1996）．コミュニケーションとしての身体 大修館書店

植野貴志子(2016)．融合的談話の「場の理論」による解釈 待遇コミュニケーション研究，**13**(3)，18-34.